

生産者の取り組み事例

県北農林事務所

新たなブドウ団地形成のためにがんばっている「みなみ葡萄ファクトリー生産組合」の遠藤茂さんをご紹介します！

福島市平石の平坦な水田の真ん中にあるブドウ園、遠藤茂さんが組合長を務める「みなみ葡萄ファクトリー生産組合」のブドウ園です。

この園地は、水田農業改革のため、県北地方ならではの果樹への転換を目指したもので、昨年秋に水田を造成し、県育成品種「あづましずく」を中心に植栽した園地です。



また、遠藤さんは個人で、植栽から4年目を迎えた「あづましずく」の園地も所有しています。

「あづましずく」は、県果樹試験場が育成した4倍体の無核品種で、大粒の「巨峰」によく似た品種です。しかも、「巨峰」より20日から30日早く収穫でき、お盆前の出荷が可能な極早生品種です。この魅力にひかれて取り組むことにしたと遠藤さんもおっしゃ

っています。また、味も酸味がきつなく、さわやかな風味が暑い夏にぴったりということでした。

その一方で、品種として育成されてから日が浅いため、栽培特性に不明な点も多く、遠藤さんは県と共同で栽培技術の確立に向け現地試験を行っています。

ブドウをはじめとする果樹については、木の仕立て方（主に剪定手法）に熟練した技術を要するため、新規での参入は困難で、生産者が増えないのが現状です。「みなみ葡萄ファクトリー生産組合」では、メンバー6名のうちブドウ栽培経験者は



2 名と新規参入者が多く、簡易な栽培方法を導入する必要がありました。そこで、簡易かつ作業効率が良い短梢栽培を遠藤さん個人の園地で先行導入し、栽培試験を行いました。その結果、ある程度のめどが立ったため、組合の園地に導入しました。

県のブドウ栽培では、長梢せん定が一般的ですが、短梢栽培は、省力化、早期多収を目的に行われる栽培法です。短梢栽培とは新梢の基部を2～3芽残して切除し、この芽から発生する新梢に花序をつける栽培法のため作業が単純化できることで熟練した技術は不要です。短梢栽培は、樹勢が落ちることも懸念されますが、遠藤さんによると、「あづまし



短梢栽培を行っている「あづましずく」

ずく」は、樹勢が強く、短梢栽培に向いており、特に心配はしていないということでした。確かに実際に園地の「あづましずく」は、枝葉の状況、実の充実度合いがすばらしく、びっくりしました。

現在、「みなみ葡萄ファクトリー生産組合」では、3.4haのブドウ園地を持っています。まず、この園地において、「あづましずく」という品種と「短梢栽培」という手法で安定生産を実現し、生産組合を盛り上げていきたいとおっしゃっていました。また、水田転作の手法の1つとして「みなみ葡萄ファクトリー生産組合」が当地区のモデルとなり、結果として平石地区が一大ぶどうの生産地となることが夢だそうです。

遠藤さん、みなみ葡萄ファクトリー生産組合の皆さん、今後のご活躍を期待しています。